

エッセイ

奥野長晴

滋賀県立大学名誉教授

1963年 はじめてパスポートを手にした。それ以来今日まで取得した冊数は10を数える。出国のスタンプ数は112、つまりこの44年間に112回海外旅行をしたことになる。しかもそのほとんどが航空券とホテルを自分の手配による自由旅行だ。地図さえあれば、初めて訪問した都市でも公共交通機関を利用してどこへでも行くことができる。ニューヨークのタクシーの運転手と猥談をしたこともある。メルボルンの市電の中で知り合った若い女性を食事に誘い出すことに成功もした。こんな実績があると、自分の英語力に絶対の自信があると嘯いても許されるであろう。しかしながら、この自惚れゆえに詐欺に遭遇した。そして私の虎の子、何がしかのユーロが巻き上げられた。被害の拡大防止のため、恥を忍んでその顛末を書いてみたい。

それはアテネの街中で起こった。ヘレニック水協会の招聘により、アテネの300km北方の町、ラリサ市にて講演、その帰路アテネに立ち寄り数日のパッケージを楽しむことにした。アテネ滞在の二日目のこと、一人でアテネの代表的な観光スポットを歩いてみた。古代のアゴラを出発点とし、アクロポリスを見学、アドリアヌスの門を右手に眺め、ゼウスの神殿の手前に来たとき、

時間は午前11時を少し回っていた。そこはバシレオス・コンスタンチヌス通りで、人通りも多い。歩き疲れたので休憩をかね、ベンチに座って地図を広げ、ルートを調べることにした。その数分後、中年の男性が私に英語で話しかけてきた。彼は財布を見せながら、おのぼりさんを装って、英語で話しかけてきた。

「私はイタリア人です。アテネに着いたばかりなので、ユーロをもっていません。このリラを両替したいので、銀行がどこにあるかをその地図で教えてくださいませんか。」と言う。それに対して、

「私もアテネに来て2日目銀行の場所は知りません。」と答えた。その直後突然、屈強な男性が我々二人の前に立ちふさがり、身分証明らしきものをちらつかせながら、自称イタリア人に対してきわめて高圧的に、

「私はツーリストポリスである。君はこの日本人に両替をしてもらったろう、銀行以外の場所での個人的な両替は違法であることを知っているのか！警察まで来よう。」と怒鳴りつけたのである。自称イタリア人は震え上がり、哀れな声で、

「両替をしてもらっていません。銀行がどこにあるかを尋ねただけです。」、そして私対しても、

「ね、そうでしょう。そのことをこの警察官に伝えて下

さい。」と哀願した。それを真に受けて私はイタリア人を弁護する側に回ってしまった。警官に対して、「彼の言うとおりに両替をしていません。」と抗議した。すると、かのツーリストポリスは、

「その証拠のために、財布を見せてほしい。」と言う。こともあろうに私はそれに従い、財布を易易として手渡した。彼は私の前で財布の中身を点検、そして、「問題ないようですね。ご協力感谢您します。」と言いながら私に握手を求めてきた。一方自称イタリア人に対しては、

「君に関する疑惑が解けた訳ではない。警察まで来よう。」と厳しい態度をとり続けた。これを聞き、少なくとも自分は助かったとの思いが先走り、安堵感から、私はつい「Thank you very much.」の言葉とともに、警察官の握手に応じたのであった。るんるん気分その日の午後を過ごし、夕刻ホテルに帰って、財布の中身を調べて、はじめてそれが詐欺であることに気がついたと言

う次第である。彼は私の前でユーロ札を点検する振りをするしながら、何枚かを掠め取っていたのだ。結局、これは自称イタリアのおのぼりさんと自称ツーリストポリスとの2名で仕組んだ演出だったのである。相棒を傷

詐欺の名人芸

みつける振りをして、私の同情心を喚起し、財布を自ら提出しよう仕向ける、しかも握手までさせ、詐欺であることに気づかせない。これは見事な心理作戦ではないか。私の前で札を抜き取る技術、これはもう芸術と言うべきレベルに達している。知恵比べは私の完敗だ。それ故、この詐欺に遭っても悔しさより先に、ある種のすがすがしさを覚えた。

後から考えてみるとおかしなことが多い。イタリアの通貨はユーロだ。イタリアの旅行者がリラを持っているはずがない。自称ツーリストは私服だった。警察官が私服で勤務している訳はない。タイミングよく警察官が出現することもおかしい。もし日本語で考えればこんなことはすぐわかる。しかし英語による思考の世界ではこれが見抜けなかった。結局、英語がわかっているつもりでも、理解力と判断力ははるかに劣っていたのである。英会話ができることと判断力とは別物であることがこれでよくわかった。

現地旅行社によれば、この詐欺の手口は新種とのことである。「貴重品はホテルの金庫に預け、持ち歩きは小金だけ」、「一人歩きの時は日本語で思考する」、「怪しい時や緊急時には日本語を使え」・・・が外国に於いてリスク回避の要諦である。